

午後三時。

会議を終えた重役らが娯楽室で一息つく間、リズはノエ・ラルーシユの案内でタワーデリックや作業甲板を見て回った。

高くそびえ立つタワーデリックや巨大なパイプラック、パワークレーンなど、初めて目にする機械設備に目を丸くしながらも、心はただ一つのを追っている。それは思慕というより、アル・マクダエルの娘としての気遣いに近い。

そうして格納庫の手前まで来ると、リズはぴくりと足を止めた。

「どうかしましたか？」

「いいえ、何でも——。想像より、ずっと大きいので驚いただけです。案内して下さって、どうもありがとうございます。ここからは一人で見て回りますわ」

「そうですか。所々、危険物を置いてますから、黄色いステッカーに気を付けて」

ノエが特に気に留める様子もなく格納庫の奥のファ

クトリーブースに向かうと、リズはほっと一息ついて屋内を見回した。

予想していたより、ずっと奥行きがあり、天井も高い。左方の整備エリアには、全長八メートルのピートル型破砕機と全長九メートルの集鉱機が順番を待つように並び、周りにはリフトやジャッキ、コンプレッサーなど整備用機械が所狭しと置かれている。

一方、プロテウスは何所にあるのか。

右手に向かい、パネル式の可動間仕切りの向こうを覗いた時、鮮やかなクロムイエローの船体が目に入った。

あれがプロテウス……？

ラグビーボールみたいに円くて、愛嬌のある形をしている。潜水艇というから、もつとおどろおどろしいものを想像していた。船体前面にはLEDライトやマニピュレーターが取り付けられ、今にも手足が動いて、お辞儀しそうな愛らしさである。

それからハッチのある船体上部を見上げ、興味津々、後部に回り込んだ時、リズは「あっ」と声を上げそうになった。

ヴァルターが腕組みしながら黄色い船体にもたれ、

宙の一点を凝視している。

リズは慌てて立ち去ろうとしたが、うっかり足元に落ちていた工具を蹴ってしまい、その物音で彼が振り向いた。

彼女と目が合うと、彼も驚いたように目を見開いたが、すぐに目を反らすと、「パパに頼まれて様子を探りに来たのか」とぶっきらぼうに言った。

「そうじゃないの。一度、潜水艇を見たくて……」

「だったら、向こうに行ってくれないか。俺も虫の居所が悪い時がある。不意な言葉で君を傷つけたくないんでね」

「……分かったわ」

リズは納得すると、黙って踵を返した。

もう一度、いくつもの機材が取り付けられた船体前面を見上げ、これだけのものを水深三〇〇メートルの海底で、しかも一年以上のブランクを乗り越えて操作するのはどれほどのプレッシャーだろうと思いつらせた。長く伸びたマニピュレーターの手先に触れ、祈るような気持ちで立ち去ろうとした時、彼が彼女を呼び止めた。

「八つ当たりして悪かった。君には何の関係もないの

に」

「いいのよ。誰だって、そんな時があるわ。それより私に手伝えることはない？ 工具の整理でも、庫内の掃除でも、何でもやるわよ」

「いいよ。ここは女の子がうろうろしている場所じゃない。それより、こんな所に一人で来てよかったのか。パパが探し回ってるんじゃないのか」

「どうせ何所に居ても探し出すわ、追跡デバイスで」

「追跡デバイス？」

「GPSを使った追跡システムよ。私の身体のどこかに小型発信器が埋め込まれているの。富裕層の女性たちは『犬の首輪』と呼んでるわ」

「正気か？」

「本当よ。トリヴィアでは富裕層の子女を狙った犯罪が社会問題になっているの。私も子供の頃に手術を受けたわ。父と伯母と警備会社だけが発信器のシグナルを追跡できる。いつでもデバイス一つで私の居所が分かるのよ」

「それじゃあ、まるで犬と同じじゃないか」

「仕方ないわ。私と同じ年頃で恐ろしい目に遭っている人は少なくないもの。子供でも容赦ないって」

「アル・マクダエルの娘でいるのも大変だな」

「もう馴れたわ。犬の首輪もずっと付けていると身体の一部になってしまみたい。束縛されるのは辛いけど、一方では安心もしてる。何処に連れ去られても、パパがきつと見つけ出してくれるから。それより、格納庫って、いろんな機械があるのね。潜水艇もUボートのような乗り物を想像してたわ」

「とにかくブリッジに戻った方がいい。俺が連れて行くよ」

「まだ戻りたくないわ。せっかく、ここまで来たんだもの」

「君も強情だね」

「ええ、そうよ。アル・マクダエルの娘ですもの。時には思い切り口答えすることもあるわ。いつもパパが絶対的に正しいわけじゃなし、あなたも一言、ガツンと言ってやればいいのよ。『おい、タヌキ、いつも偉そうにしてるんじゃないぞ』って」

リズが面白おかしく口真似をすると、彼は一瞬目が点になったが、

「俺は一応、あの人に敬意を払っているから、それは言わないけど、君の反抗心はちょっとばかり手助けし

てやりたい気がするよ」

「どうやって?」

「どこか見たい場所があれば、一カ所だけ案内する」

「じゃあ、プロテウスの中を見せて下さる?」

「どうして?」

「一度、海の底がどんなものか見てみたいの。どれほど目を凝らしても、海の上からは決してその姿を垣間見ることにはできないもの。そして、私には搭乘する機会は永久にない。だから潜水艇だけでも間近で見たいのよ」

彼は了解すると、タイヤ付きの移動梯子をプロテウスの船体側面に寄せた。一段、一段、慎重に梯子を登り、改めて全体を見渡すと、まるで空飛ぶクジラのよう感じる。どっしりと重量感があって、流線も美しい。

彼がハッチを開くと、リズは恐る恐る耐圧殻の中を覗き、「まあ、あんなに機械がいっぱい。それに随分狭いのね」と嘆息した。

「怖いなら、やめた方がいい」

「いいえ、行くわ。今行かなかつたら、もう二度と機会は無いもの」

リズが勇氣を出すと、最初に彼がハッチの中に入り、「この梯子を下りるんだよ」とやって見せた。ハッチの下方に取り付けられたのは小さな折りたたみ式の梯子で、足を踏み外せば、どすんと落ちそうだ。彼が心配そうに見守る中、一つ一つ梯子を下り、ようやく足先がカーペットに着くと、どっと緊張がとけて、その場へあたり込んだ。

「君にはエベレストのような冒険だね」

「『エベレスト』?」

「ステラマリスで一番高い山だ。標高が八八〇〇メートルある。でも海の深い所はそれよりも深い」

「世界で一番高い所も、深い所も知っているのね」

「深い所だけだ。高い所はほとんど登ったことがない。

俺、低地(ネーデルラント)の人間だから」

「低地って、どれくらい低いの」

「海面より低い」

「想像がつかないわ」

「お盆の底に住んでいるようなものだよ」

「まあ……お盆の底に……」

「どうやらリズには何を言ってもピンとこないようだ。二人は覗き窓を挟んでカーペットの上に腰を下ろす

と、耐圧殻の中を見回した。

球状の空間には計器類が所背増しと並び、ソファもトイレも何も無い。少し身体を動かせば物に当たり、息も詰まりそうだ。

でも、胸が苦しいのは耐圧殻のせいではない。ちょっと手を伸ばせば、すぐに掴まりそうな距離感だ。

リズは氣を紛らわすように周りを見回し、「本当に狭いのね」と呟いた。

「内径はたったの二メートルだ。大人三人が乗り込めば、ほとんど身動きもとれない。スケジュールによっては、この中に九時間近くも閉じ込められるから、深海調査も体力勝負だよ」

「でも、潜航するのは素敵でしようね」

「そうだね。人が行けないところに行けるからね」

「どうしてプロテウスのパイロットになったの?」

「商船学校の実習でプロテウスの潜航を見学した。黄色い船体がゆっくり海の底に沈んでゆくを見た時、自分自身が深海に降りて行くような気がした。その感覚が忘れられなくて、パイロットを目指した」

「初めての潜航は何歳の時?」

「二十三歳だ。最初は整備の仕事を通してプロテウス

の構造や機能を覚え、シミュレーターで操縦訓練し、基礎が完全に身についたら、ベテランのパイロットに付いて副操縦士として初回の潜航を経験する。今はなり手が少ないから、けっこう即席だね。俺も海洋技術センターに入所して八ヶ月目には操縦桿を握った」

「年に何回ぐらい潜ってたの？」

「年に二十回から三十回だ。一つミッションが終わると、またすぐに応援を依頼されて、西に東に飛び回っていた」

「水深数千メートルの海底って、どんな世界？」

「真っ暗だよ。あらゆる波長の光が吸収され、強い投光器で照らしても、目視できるのは、せいぜい半径十メートルほど。音もなく、色もなく、生き物もほとんど見かけない。でも、地上よりはるかにダイナミズムにあふれた世界が広がっている。人間が介在しない、ありのままの自然だ」

「なんだか想像がつかないわ」

「じゃあ、こんな風に想像して。あらゆる光が吸収される真っ暗な水底。それも指先に大柄なプロレスラーが何人も乗ったような超高圧だ。フィットネスプールでも、深く潜れば胸が苦しくなるだろう。あれが

何百倍、何千倍にもなった感じだ。人間はもちろん、フォルトウナ号だって、そこまで潜れない。だが、海底も陸地と同じように山があり、谷があり、その底には深層流も流れている。摂氏二百度の熱水の周りで群れを成すチューブのような生物もいれば、水深六〇〇メートルの海底をゆうゆうと泳ぎ回る魚もいる。地上の人間には決して見えないだけで、深海も生きてるんだよ」

「海について話す時のあなた、とても生き生きと輝いて見えるわ。もっと話してくれる？ 海の底に潜るのはどんな気分？」

「静寂だよ。地上の一切から離れて、心の一番深い所に降りていく。夜の底で耳を澄ませるみたいに。潜ってみるまでは何に出会うか分からない。熱水か。生き物か。それとも未確認の珍しい現象か。何にせよ、そこで出会うものはみな新しい。人の手が一切加えられてない、本物の自然だ。そういう深みに降りて行く時だけ、俺は不思議と自分の感情に素直になれる。不安も、淋しさも、海の底なら恐れずに向き合うことができるんだ。そして、数千メートルの深みから船に戻ってくる時、どこか新しく生まれ変わっているような気

がする。もちろん、心の中での話だけだ」

「私も行ってみたいな、そういう所」

「心の中で行けるよ、いつでも」

「心の中で？」

「想像力で潜るんだ。俺が連れて行ってやるから、目を閉じて」

「……こう？」

言われた通りに目を閉じると、彼は遠い海を懐かしむように覗き窓の向こうを見つめた。

今、君は耐圧殻に乗り込んだところだ。整備士が声かけて、天井のハッチを閉める。これで外界とは遮断され、ミッションが終わるまで缶詰だ。慣れないうちには少し息苦しく感じるが、潜航を開始したら、覗き窓の向こうに広がる世界に心を奪われる。耐圧殻の外では甲板員がAフレームクレーンの索を取り付けるのに忙しい。カタカタと金属音が響き渡る中、君の胸は不安と期待でいっぱいだ。

取り付けが終わると、いよいよ海に出る。クレーンがプロテウスを吊り上げ、ブランコみたいに作業甲板

の外に降り出して着水する。その間、プロテウスは大きなラグビーボールみたいに海面にユラユラ浮かんでいる。海上で待機していたダイバーがプロテウスの船上に乗り移り、クレーンを固定している索を外せば、いよいよ潜航開始だ。バラストタンクからエアが抜け、炭酸ソーダみたいに大量の泡を吹き上げる中、浮力を失ったプロテウスが徐々に海水に沈んでゆく。

五〇メートル。次第に天空の光が遠ざかり、地上とはまったく異なる海の世界が開けてくる。

二〇〇メートル。辺りは静寂に包まれ、ほとんど光は届かない。ここから先は海の生き物と惑星のダイナミズムが支配する世界だ。人間など遠く及ばない。

五〇〇メートル。おや、あれは何だろう？ さらさらの泥で埋まった海底に白い水みたいなのが見える。地中のガスが海底の水圧と低温によって水みたいに固まったんだ。あそこでは、地中から湧き出すガスが水槽のエアポンプみたいにブクブク立ち上っている。一つ、二つ、かなり勢いがある。

一〇〇〇メートル。ここは海底火山のカルデラ底のど真ん中だ。あそこには大量の黒い溶岩が枕のように固まって岩盤を覆い尽くしている。つい最近、誰も気

付かないうちにマグマを噴き出したんだ。海の上からは何も見えないけど、ここでも、あそこでも、海のは山は絶え間なく活動している。そのエネルギーが惑星の生命を支えているんだよ。

二〇〇〇メートル。前方に奇怪な岩が見える。巨大な鍾乳石みたいにそびえ立ち、真っ黒な煙をもうもうと噴き出している。これはブラックスモーカーだ。地下でマグマに温められた熱水が地中の金属成分を大量に溶かし込んで、こんな黒色になった。水温は二七〇度。ここは超高压の世界だから、熱水も蒸発せずに、気体でも液体でもない状態で海中に噴き出す。その周りには、化学成分を栄養にしている目のないカニや二枚貝、白い蛇腹みたいなチューブワームがびっしり繁殖している。彼らはこの熱水が大好きだ。人間には有害な物質も、彼らには極上のご馳走だ。何十億年も昔、最初の生物がこういう過酷な環境で誕生したと言われているが、それを決定づける証拠は未だ得られていない。それでも、みな黙々と生きている。小さな岩場で、彼らなりに共存共栄の生命システムを作り上げ、何億年と生きているんだよ。

四〇〇〇メートル。ここからはA B Y S S と呼ばれ

る深海の世界だ。人間なんか一瞬でベチャンコになる。それでも、どんだん海の深みに降りてゆく。そんな深みにも惑星のダイナミズムを感じさせる不思議な現象や生き物がたくさん存在する。

五〇〇〇メートル。ここまで来れば、もう一つの宇宙の果てにいろような気分になる。音もなく、光もなく、想像を絶するような超高压に包まれた神秘の領域だ。動くものなど何一つない。だが、目を凝らせば、光り輝くものが漂っている。透明なクラゲみたいな生き物だ。全身をネオンサインみたいにキラキラさせながら、ふんわりと深海を泳いでいる。君はどこに棲んでいるの？ 何を食べて生きているの？ 問いかけても返事はない。名前すらない。でも、名前なんかなくても、生きている。自らの命を楽しむみたいに。なんて健気で可愛いんだろう。誰にも捕まるんじゃないよ。いつかまた、深海のどこかで会おうね。

六〇〇〇メートル。いよいよ海溝の底だ。そこは海の谷の果て、誰も触れたことのない神秘の世界だ。まるで海の女神に導かれるようにプロテウスも降りて行く。まるで宇宙の胎内を旅するように、ゆっくりと、

静かに……。

ふと彼女の方を見やると、覗き窓から差し込む淡い光の中で、彼女はまるで幸福な夢でも見るように目を閉じ、想像の海に泳いでいる。珊瑚色の唇をツンと突き出し、両足を人魚のように揃えて。

彼は思わずバラストタンクの栓が抜け、そーつと顔を近づけた。

彼女はまだ気付いていない。

目標まで五〇センチ。

マニピュレーターを伸ばすか？ いや、焦れば獲物を取り逃がす。

あと四〇センチ。やっぱ綺麗だ。

特に、この誘うような唇が……。

その時、リズがはつと瞼を開き、彼もとっさに覗き窓に張り付いた。

リズは真っ赤になって俯き、声を上ずらせた。

「あの……実況が途切れたので、どうしたのかと……」

彼は覗き窓に張り付いたまま、

「今、巨大イカが覗き窓の外を通り過ぎたよう気がする

てね」

「イカ……?」

「職業病だよ。時々、海の生き物の幻影が見える」

リズはぼかーんと彼の後ろ姿を見つめていたが、一意専心のパイロットとはそういうものかもしれないと納得し、「大変なお仕事なのね」といたわるように言った。

彼は覗き窓に顔を押しつけたまま、「そろそろ出ないか。じきに皆戻ってくる」と呟き、リズも「そうね」と頷いた。

彼が立ち上がると、彼女も腰を上げ、無言で耐圧殻の外に出た。